

韓国仏教現状調査

—— 禪院を訪ねて ——

袁 輪 頭 量

はじめに

韓国仏教に関する論文は、鎌田茂雄氏の『朝鮮仏教史』⁽¹⁾を始めとして歴史的に扱ったものがほとんどである。韓国に存在する仏教の現状について報告するものは意外と少なく、管見の範囲では前田惠學氏の「韓国仏教の特質」⁽²⁾と金龍煥氏の「韓国仏教の特質と現状」⁽³⁾が、注目されるべき数少ない論考の一つであろうか。

筆者は平成十五年八月二十四日から二十九日にかけて、韓国の仏教寺院を訪問する機会に恵まれた。韓国の仏教界において最大の集団が曹溪宗⁽⁴⁾である。今回の調査は、この曹溪宗に所属する寺院のみではあったが、それらの寺院は、

寺域内に禪院と呼ばれる座禪の専門道場を持ち、伝統的な禪の修行に打ち込んでいた。僅か六日間の短い調査期間ではあったが、幾つかの知見を得ることができたので、本論では簡潔に、知り得た範囲内の韓国仏教の坐禪の現状について報告することにした。

一 韓国仏教の宗派

韓国仏教には二十八の宗派が存在するといわれる。もっとも大きな集団がソウルに拠点を置く曹溪宗である。曹溪宗は現在の韓国を代表する宗派であり、全国に二千箇所の寺院、一万五千人の僧尼を抱える。韓国仏教の宗派は一面では日本の宗派に相当するようなものと考えて良い。但し、

韓国仏教現状調査（襄輪）

各集団が組織する連合が存在するので、日本のような排他的なものとは言えない。曹溪宗の他に、妻帯をし在家主義を標榜する太古宗なども存在する。今回の調査で訪れたところは全て曹溪宗の寺院であり、場所も全羅南道、慶尚北道、慶尚南道と多岐になった。以下、訪れた順に記していきたい。なお、韓国では僧侶の敬称として「スニム」が用いられているので、ここでは慣習に従い、僧侶をスニムと表記する。

二 雙溪寺

場所：全羅南道智異山

調査協力僧：講主 通光スニム

教務長 智門スニム

調査日：平成十五年八月二十四日

インタビューは雙溪寺の講主である道光スニムおよび教務長の智門スニムを情報提供者に、全南大学の李中約先生を立会人、通訳として同大学曹潤鍋先生（以降、通訳を全とお願ひした）が当たった。さらに Gyana Raina 氏、東北福祉大学助教齊藤仙邦先生、及び小生の合計七人を交え、

座談の形式で行われた。

まず道光スニムより現在の曹溪宗僧侶の資格に関する話があった。曹溪宗において出家するには、高卒以上でなければ沙彌になれないとの原則があるようだ。実際には十五歳以上という条件なのだが、実質、高卒でなければ沙彌になれないとのことで、僧侶の方は少なくとも高校までの世俗教育を受けていることになる。また、沙彌になる前に行者の期間があり、六カ月間、行者をしなければならぬ。

この時、まず最初の試験があり（試験五級）、合格して初めて沙彌になることが許される。そして、沙彌になって講院に四年以上入るか、あるいは東国大学（仏教学科またはインド哲学科または禅学科）を卒業するか、あるいは禅院に四年以上入るかしなければ比丘または比丘尼になることはできない。このようにして試験四級の比丘または比丘尼になるようだ。現在、出家者の基準を厳しくしているところの一つの特徴を見てとれ、途中で断念する人も少なくないという。また最近では、出家に関する年齢の制限も設けられ、四十歳が上限とのことであった。

沙彌の試験は、曹溪宗の教育院という機関が主管し、問

題を作成する。また大卒で出家希望者の場合は、それらの人々を集めて講義を行い、後に試験をするそうだ。

比丘を十年経過した後には、三級試験を受験する資格を得られる。但し、その十年間に幾つかの条件が必要とされる。まず三年間禅院で禅の修行をし、かつ二年以上大学院クラスの教育を受けなくてはならないという。大学院クラス教育というのは、寺院に設置された機関においても可能であるといい、また分野を問わず博士号を取得した場合には、この条件を満たした者と読み替えることが可能であるという。

三級試験に合格した後には、小さな寺院の住持または本寺の幹部僧になることができる。さらに三級僧侶で、受戒後十五年を経た者は曹溪宗の総務院（日本でいう宗務院）の幹部として勤務することができる。

現在、出家者の平均年齢は三十四〜五歳であり、一年間に出家する方の人数は数百人だそうだ。

次に禅房の概要を説明していただく。禅房とは座禅を実習することを専門にする道場を指す。禅院との呼称も用いられる。禅房での生活には規律が存在し、座禅の時間が必

要に依じて定められている。一日に八、十、十二、十四時間と四タイプに別れるという。どれだけの時間を座禅に費やすかは、禅院を持つ寺院の裁量に任されており、雙溪寺は十時間を宛てる。実際の実習の仕方は、一年のうち、安居の三カ月間に実習すればよいことになっており、一年一回の安居を四年間続ければ、四年間禅院を経験したこととして認められる。また、無門関の習慣（中国仏教界でいう閉関のこと）も存在し、入関したら一歩も外に出ないというような修行の形態も存在する。三年が期間で、ほとんど監獄の独房のようなものだという。比丘のみであるが、希望者も多いという。しかし、無門関のできる禅院は韓国国内に三箇所と少なく、入れる人数も少ない。出る人がいなければ入れないという状況だそうだ。また、無門関を修了したからといって尊敬されるわけではないという。そのような状況なので、個人的に山に入り庵を作って修行する人も多い。禅房に入っている人は朝三時に起床し座禅に入るが、それ以外の人々は自由に座ることが多い。自らの勉強に努める僧侶も多い。

次に実際の瞑想の内容について話を聞いた。

禅房で行われているのは看話禅であるという。看話禅は考案を与えられ、それを考察する禅のことである。入息出息観や数息観を实習する人は少ない（というよりはほとんど無い）。座禅の目標は見性成仏であり、いまだ主客に別れない以前の本来の自己を見つけることにあるという。主客二分から集中して「一念」になる時、それが見性であるという。「見性成仏」が語られているが、これは伝統的な禅宗の常套句であり、具体的なことがわからない。また看話禅は話頭禅とも呼ばれるという。話頭（話の頭、すなわち発話時の最初の心の揺らぎのようなもの）を観察することともいわれ、未分の本来の無念を捕まえることも考えられる。看話禅の悟境を別の言葉で表すことができるかどうかと聞いたところ、それは「境智冥合」であるとの答えが返ってきた。これが見性の世界と同一視されているという。こちらが認識されている対象も認識している意識もその両者が働きを止めている「境識俱泯」の境地と一致するのかと質問したところ、そうではないとの答えが返ってきた。「定慧双修」が理念として存在するが、アートマン的な自我を求めるのではないとの返事もなされた。結局、心を観察し

主客未分の世界を直観的に捉えることが目指されているのだという結論に落ち着いたが、具体的なところが今ひとつ捕まえ切れなかった。「主客未分」という至極一般的な言葉で語られ、自らの言葉で語ってもらえなかった点は若干、残念であった。

なお、通光スニムは講説が専門の僧侶であり、座禅は主ではないとのことであったので、概説を聞かせていただいたということで、満足するしかなかった。

三 国師庵

場所：国師庵

調査協力僧：仏潭暁慶スニム（四十六歳）

調査日：平成十五年八月二十五日

国師庵は雙溪寺に所属する庵であり、かつて此処から国師が出たことに因み、国師庵と呼ばれる。暁慶スニムは二年前に無門関を修了した僧であり、禅房における生活を中心にお話を聞かせていただいた。

韓国国内には三箇所無門関が行える禅院が存在し、暁慶スニムはベクタムサの禅房に入り二年半修行し、二〇〇一

年に行出したという。無門関への入行の資格は比丘になつてから十年以上、自分で瞑想上の問題を解決できると思われる人のみである。無門関が実習できる禅院は国内に三箇所しかないので、実際に入行できる僧侶は全体の一パーセント以下であるという。希望があつてもなかなか入れないというのが実状のようである。また希望しても、自分で問題を解決できる人のみという暗黙の了解から、一般に周りの人が「この人は入るにふさわしい境地にある」と認めなければ入行することはできない。

無門関を行う禅房の部屋は、天井は高いが狭いという。入り口の左側にシャワーとトイレ、奥に窓を備えた一部屋があるだけの質素なものであるという。部屋には数冊の本を持ち込むことは許されている。食事は一日に二回、禅院の賄いで自らが作ることはない。毎日の日程は、朝六時にお粥の朝食、十一時に昼食、但し賄いものであるので、お弁当のような感じという。食器は自分で洗って返却する。これ以外の時間は瞑想に費やす時間であり、自主的に過ごすことを求められる。行慶スニムは、修行の間、いつのまにか独り言を言うようになっていたという。

韓国仏教現状調査（襄輪）

無門関に入行中、三年間は一切部屋の外に出てはいけないという規定ではないらしい。実際には最初の三カ月間は部屋の外に出ることが禁止されているが、次の三カ月間は部屋の外に出て、禅院の中を散策することも可能である。中には、全く籠もりっぱなしの人も居るそうだ。暁慶スニムは体が弱るのを恐れ、毎日、部屋の中でヨーガを一時間くらい実習したそうだ。

入行中には看話禅を実践するという。因みに無門関に入行した人の語録とか日記とか指南書になるようなものはないらしく、まったく自ら工夫し実践するのみだそうだ。また、三カ月が過ぎれば部屋の外に出られるので、人と話をすることも可能になる。なお、禅房の部屋では隣の人の生活の物音が聞こえるので、それが非常に気になったそうだ。暁慶スニムは二年半の修行の後、何となく「力を得た」というような気持ちになったという。入行者の中には、瞑想以外に何か別の目的を持って入る人もあるそうだ。

四 実相寺

場所：全羅北道

韓国仏教現状調査（襄輪）

調査協力僧：道法スニム（五十五歳）

調査日時：平成十五年八月二十五日（深夜）

国師庵より李先生の車に揺られること四時間近く、ようやく辿り着いた実相寺において、深夜にかけてインタビューを行った。

道法スニムは現在、社会福祉活動に尽力している方で、韓国国内でも有名になっている。スニムは現在の看話禪がどのような意味を持っているのか大変に批判的な立場に立っておられ、まずそのようなことから話された。今、現在の韓国仏教界は、資本主義的な立場に立っており、欲望をどのように実現するかに努めているような気がするという。禪に批判的であるのは、①私たちが禪を誤解して理解しているから、②仏教あるいは禪そのものが問題であるからのいずれかであろうという。このような質問に対し、こちらが逆にインタビューされているように感ぜられたが、過去の仏教がすべてにオールマイティーであるとは言えないのではないか、仏教が問題として設定してこなかったことが現在の社会では起きており、それに対して仏教者達は新たにどのように対応すべきか今、迫られているというの

が実状ではないかと答えた。このように先方の質問にも答えながら、インタビューは進められた。

なお、スニムは、韓国の禪は韓国的になっていてインド的な理解とは異なるのではないかと意識を抱いておられた。また、個の内面性と社会との関連性を抜きにせず一体のものと考えてるのが仏法の縁起の世界ではないか、また、その両者に境界線を引いているのが韓国の仏教の問題点ではないかと指摘していた。修行に対する理解もこのような方向性で理解しているようであり、私たちの希望する方向にもって行くのが修行である、外の世界と内の世界は一体のものであるとのことを強調なされていた。

他者の苦しみに無関心であってはならないという仏法の述べる慈悲、とりわけ悲の精神に敏感なように感ぜられた。さて、座禅のことに関する質問に対しては次のような意見を述べられた。

座禅すること自体が目的化していて、その意味とそれを通じて何をすべきなのかを忘れているとの強い危惧感が表明された。おそらく印度仏教からの伝統を考えれば慈悲や中道の実践に至るのであるが、そのようなことが忘れら

れているということなのだろう。また、韓国の仏教者たちは韓国の看話禪は哲学的であるはずなのにそれを求めてはいない、また何か絶対的なものがあるように捉えているという。また、最近では、印度から流入した samatha や vipassanā などのテクニクに集中しすぎて、本来の目的を忘れている。(これは、数年前にミャンマーに修行に行つた韓国僧が帰国後、上座仏教の瞑想を紹介し、今、少しずつ広まりつつあるとの風聞を得ていたので、それに関する批判であろう。)

さて、実相寺の場合には、看話禪の実習をする僧が十人ほど周辺山間部の庵にこもり、行を続けているそうだ。また華嚴の思想を学ぶプログラムで学んでいる僧が十二人ほど居るといふ。学解の僧と実践の僧と二種類に分かれ、運営されているようだ。また、任職の社会活動の一環として帰農運動にも取り組んでおり、有機農法を進める意味もあつて、昔ながらの人糞や家畜糞などを利用した農業の実践指導をしたり学校の問題児を受け入れたりと、積極的に社会活動に取り組んでいた。(次の日の早朝、まだ年端もいかない小学生くらいの子を見かけたので、受け入れた児童であろう。)

韓国仏教現状調査(襄輪)

なお、興味深い話として、現在、韓国では印度のヨーガ的な修行法及び上座仏教の瞑想修行法である vipassanā も市民権を得つつあり、伝統的僧伽の側でも、それらを学ぶ人たちからの批判を乗り越えるべく努力がなされているという。また、住職は、確かに現代的な問題に積極的に関わり、「生命共同体を復活させること」「仏教的な生き方を社会的な生き方に変換させること」(あまりにも今までの韓国仏教が個人的な内面の問題に留まっていたということであろうか)を目標にしているという。さらには、宗教観の対話にも積極的な意見を述べており、対話が重要であること、また対話そのものが重要であること、お互いの宗教に対する健全な理解がまず前提されることなどを述べられた。

なお、韓国の看話禪では『金剛経』が重視され、無我が強調される傾向にあるという。「同体大悲」の理念に基づいて行動するのが修行であるとの意見も述べられ、現在在看話禪が復活することを願って止まないようであった。また、「同体大悲」の理念が根底にあるとき、看話禪は現代に再生するであろうとの見通しを持っておられるようである。また、人間にありがちな貪り、瞋り、痴を克服するために

韓国仏教現状調査（襄輪）

は無所有を実践することがよいのではないか、との意見もお持ちであった。現代的な説得力を持った仏教を目指して、鋭意努力する姿が彷彿とされた次第である。

以上、深夜に及ぶインタビュー調査であったが、快く応じてくれた道法スニムに心より感謝したい。なお、次の日、朝四時前に起床し実相寺の朝勤に参列させていただいた。

五 鳳巖寺

場所：慶尚北道聞慶

調査協力僧：浄光スニム（六十三歳）

調査日時：平成十五年八月二十六日（午後一時～）

聞慶の鳳巖寺は韓国を代表する禅院である。一年間を通じて百人近くの僧が止住し、安居の季節となるとその人数はもっと増えるという。禅院の院長を務める浄光スニムと約二時間近くにわたってインタビュー調査をすることができた。以下、話の内容を記す。

禅院の部屋は五人部屋を原則とし二十部屋ある。よって、ほぼ百人が収容できることになる。安居の時以外にも座禅に打ち込む人が結構存在するらしく、常に多くの僧侶が揃

うという。修行の中身は看話禅が中心であり、入息出息観や数息観は原則として実習されない。時間を決めて座るという原則を持ち、長いときには日に十六時間ほど座るそうだ。その内訳はほぼ一時間単位に細分され、約五十分は座禅で残りの十分は経行しながら公案を考える。

師に答えを伝えるのはいつでも自由に行え、また部屋単位で年数を積んだ、院長が指名した指導者が附くそうだ。

この指導者は長く安居を過ごし、宗門から認められたスニムだそうだ。

さて、実際の看話禅の実習について具体的な状況を質問してみたところ、次のような返答が帰ってきた。まず公案を与えられた僧はそれを考えるのであるが、最初に概念で頭が一杯になる時期が来やすい。このような状況の心を「散乱心」と名付けるといふ。また、やがて虚無の状態が訪れることもあり得る。こちらは「無記心」と名付けるといふ。この二つとも妨げの一つと認識されており、そのような時には「定慧双修」によって、本来の自分に戻らせるのだという。次に様々な感情が心に生じたときにはどうしますかとの質問を行った。返答は次の通り。様々な感情が生じる

のは欲望や知見に基づくものであるから、それらの原因となつてゐる欲望や知見を取り除けばよいとのこと。では、どのようにしたらその欲望や知見が取り除けるのですかと再質問。対して、公案に集中すれば良いとの返事であつた。(多少、このあたりの質疑応答は循環論的である。)

次に、看話禪の目的は何ですかとの質問を行ったところ、それは「無心の境地が目的である」との答えが返つてきた。自己の心の中の妄想心をなくすことに重点を置いてゐるようである。そして、そのような境地は「真空妙有」の境地でもあると付け加えられた。(但し、それが否定された境地も「無心」であると言われたので、多少理解しにくくなつた。)

無心の境地は涅槃の境地と捉えても良いのだそうで、日常の生活の中でも「無心」の境地を目指すよう指導する。生活の中に「無心」を実現しようとのことであろう。このような発想の「無心」は全く心が働いていないのではなく、己の欲するようにならない、自己の賢しらかな意志を加えないことのように捉えられた。すなわち老荘思想の「無為自然」に似るように思われたので、「無為自然」と同じではないですかと聞いたところ、それとは似ているが異なるとの見解

であつた。また「有為の世界」であつて「中道」とも異なる世界であるという。

また、唯識等も修学することであつたので、それは「無心」というのは唯識の述べる「境識俱泯」の境地に等しいのですかと質問した。対する答えは、「異なる」とのことであつた。

なお、看話禪では「観が先で止が後である」「止の中に観があり、観の中に止がある」と捉えるべきである等、発言された。また、看話禪の指導者は「皆、無心の境地を経験してゐる者達である」との暗黙の了解もあるようだ。皆が無心によつて働き生活してゐるとの自負心があるらしい。

なお、禅院の数は、比丘のために六十箇所前後、比丘尼のためには五十箇所前後があり、施設には、人数的には二千百人程度の比丘、九百四十人程度の比丘尼が入れるという。これだけの大人数が禅院に入り修行ができる体制が整えられてゐることは驚きである。

以上、雑談を交えながらのインタビュー調査を無事に終えたが、通訳の労を執つてくださった曹先生から方言のため非常に聞き取りにくかつたとの感想が寄せられた。

韓国仏教現状調査（襄輪）

また、侍僧の松岩スニムからも少し話を聞くことができた。鳳巖寺近くの山中に岩窟が作られており（六箇所）、そこに六年近くも籠もり一言も言葉を発せず修行に専念しているスニムが居られるそう。無門関の存在に驚いたのも束の間、さらなる厳しい行を課しているスニムの存在に、正直言って言葉もない。しかし、そのような無言の行が何を目指し何をもちたのか、指南も存在しない現状では、ただ無為に苦行に励むだけに終わってしまうのではないかとこの疑念も禁じ得なかった。

六 七仏庵

場所：慶尚南道慶州南山

調査協力僧：性観スニム（尼僧）

調査日時：平成十五年八月二十七日（午後四時三十分

～五時三十分）

聞慶から栄州の浮石寺を経て、栄州に宿泊。次の日、普通列車を使って慶州に出る。ここで統一新羅に至る前から国家の重要な寺院として存在したと考えられる南山七仏庵を詣でる。七仏庵は、仏国寺や石窟庵ができる前に、王朝

の守護を目的として創建された重要寺院であった。タクシーで山麓まで行き、道無き全くの山道を登ること小一時間。三本ほど小川を渡り、山の上腹部に存在する小さな庵が七仏庵である。一年前に電気が初めて引かれたという粗末な庵に、留守居役の尼僧さんが一人、居られた。数日前に禅院から出てきたばかりの若いスニムであり、禅院での具体的な生活内容を彼女なりの理解を中心に語っていた。インタビューの内容は以下の通り。

性観スニムが入堂していた禅院は慶州市内にある興輪寺禅院である。期間はほぼ一年。冬の安居と夏の安居を修了したが、二十人の僧侶と起居を共にしてきたという。禅院には指導者を含めて三十人前後の尼僧が存在した。一日の日課は次の通り。

午前三時 起床 十五分太鼓をたたきながら院内を回る

三時十五分～三時四十分 朝課

三時四十分～五時 坐禅

六時～ 朝食

七時～十時 坐禅

十時二十分～ 仏への供養 仏前へ供え物

十一時 昼食(昼休み)

午後一時〜四時 坐禅

六時 菓石(夕食)

七時〜十時 坐禅

(空いている時間は自由に坐禅したり掃除をしたりでき
る。)

坐禅の内容については『禅修行の特講』(全国比丘尼禅院
禅門会編)と称する教科書があり、参考に資することがで
きたという。さて、彼女の場合、坐禅の最中に次のような
ことで悩んだという。まず指導者から公案を授かり考え始
めたが、すぐに妄想が出た。(どのような内容の妄想かは話
してもらえなかった。)また、彼女の場合は眠気に襲われる
ことが多かったという。体力的にも疲れたとの実感を抱い
ている。このような状況であったことを聞き、それにどの
ように対処したかを質問した。

まず、妄想については指導者から具体的な対処は特に示
されなかったようである。眠気が生じたことに対しては昔
は警戒で敲くこともあったが、今現在では使用されていな
いという。その替わりに外に出たり歩くことも可という。

韓国仏教現状調査(襄輪)

眠気を追いやるためにピンで自分の足を突くこともあるら
しい。(これは別の痛みで眠気を克服しようという極く世俗
的な試みだろう。)しかし、本人は坐禅には向いていないよ
うなので、これからは祈祷や念仏禅を中心にしていこうと
考えるようになった。八の附く日は休息の日であり、その
日は自由に過ごして良いという。指導者に様々な質問をす
ることも可能であり、また禅院長が時折出てきて講話をす
ることもある。その中で得た彼女なりの眠気予防の方策は、
修行を積む以外にないというものであったようだ。そこで
方法を変えてやろうとの気になったとのこと。

なお、禅院では日に二、三時間しか眠らない猛者も居た
ようで、それぞれ独自の修行であったという。八日の日には
彼女も指導者に公案の答えを聞いてもらったそうだが、
どのような結果であったのかは話してもらえなかった。

以上、簡単ではあるが尼僧さんから、それもまさに禅院
を出てきたばかりの新人の方から話を聞くことができ、興
味深かった。実際の実習においては様々な受け止め方がな
されているようである。この後、彼女が入っていたという
禅院を訪ねた。

韓国仏教現状調査（襄輪）

七 興輪寺 尼僧禅院

場所：慶尚南道慶州

調査協力僧：法念スニム（住持）

調査日時：平成十五年八月二十七日（午後六時）及び

二十八日午後二時）

七仏庵のスニムが修行したという慶州市内の興輪寺尼僧禅院を訪ね、幾つかの視点からお話を聞かせていただいた。現在、住持の法念スニムは日本への留学経験があり、日本語が流暢であり、思いがけずも日本語でインタビューができた。なお、実際には二日間にわたっているが、ここでは一所に記す。まず寺院の概要から記す。

興輪寺は新羅時代、最初にできたといわれる寺院である。法輪を興す寺という意で興輪寺と命名された。日本の法興寺とほぼ同じ命名の由来である。先の住持は慧海スニム（八十三歳）であり、現在の法念スニムの師僧に当たる。興輪寺は約三十年前から尼寺になったという。韓国でも尼僧さんのパワーが大きくなりつつあるそうで、尼僧の数が増えつつある。そのような流れの中で考えれば僧寺から尼寺へ

の変更も頷ける。

さて、韓国内の看話禅について話を聞いたところ、次のような回答を得た。韓国においては看話禅が主流になっているが、それだけでは十分ではないとの意見が登場しており、今では上座仏教の *vipassana* が流行しつつある。法念スニムは多少、*vipassana* には反感もあるという。日本への留学経験の故か、今は『正法眼蔵随聞記』を読んでそれに共感を覚えるという。

さて、坐禅の中で生じてくる妄想に対しては「そのままにしておく」との対処方法を勧めているそうだ。そのままにするというのは、妄想を妄想として気付き続けていくことのようにあった。捉え続けていくと表現しても良いかも知れない。

韓国では十年前から瞑想が流行のようになったが、それはミャンマーに行き修行した韓国僧が広めるようになったからだという。avatara あるいは yoga との名称で呼ばれる瞑想も行われているという。また上座仏教の瞑想である *vipassana* には賛否両論があり、学んできた人は *vipassana* が良いというが、*samatha* に関してはあまり言及されない

という。

現在の韓国ではやはり看話禪が中心を占め、指導者から公案を出してもらい、疑問があつたら聞きに行くという形式が取られている。(この時、電話で師僧に聞くこともあるという。)最近ではあまり修行に専心する人が現れてこないとの寂しい愚痴も多少含んだような発言もあつた。

看話禪の目的は「仏になること」であり、それは「悟ること」「永遠の自由を得ること」でもあると述べられた。昔の禪門に伝わる例を挙げて、現代語で語るように心がけており(すなわち語録の言葉はあまり使わないように)、たとえ使用することがあつても、「私ならこのように答えるだろう」と、できるだけ自分の言葉で語る努力を心がけているという。「無^二」の公案などでも、悟る人は確かにいるので看話禪が続けられているのだろうが、もつと良い方法があるのではないかという思いがあり、昔のままの看話禪では悟る人が少ないとも思うという。釈尊の言葉に従って修行方法を見つけないという気持ちが高い。

看話禪では、一つのを掴んだらそのままずっと居るという。韓国の伝統にあつた修行法があるのではないかと

韓国仏教現状調査(襄輪)

いう文化的な側面からの意識もあるようであつた。

また、本人が日本に学んでいたときの話にも及び、日本には仏教があるけれども信仰心がないとの手厳しい批判の言葉も飛び出した。さらには僧堂を比べてみると、日本の僧堂の方が厳しい感じがするともいう。韓国の禪院では、修行者が何か掴んで特別だと思われる時には、指導者は二人きりで話をするという。相手の目を見れば指導者は相手がどのような境地にあるかわかるという。唯、最近の若者は個性が強いので、あれこれと老婆心を働かせて指導するのではなく、相手に任せておくのが一番良いようだと考えているという。やがて心の変化に自然と気付くようになり、その心の変化は後から「あ、そうだったのか」と気付くようなものであるという。

良く修行者に向かつて「無念」「一念」あるいは「一念万念」との言葉を用いるそうだ。それは、公案だけがずっと続くことを指すのだそうだ。

また、出家者達の共通の理解として、韓国仏教界には千七百の公案が存在するが、本当に悟ればそのどれにも答えられるはずだという前提が存在しているらしく、そのよう

な状態のことを「差別三昧」と呼ぶそうだ。これに入らなければ悟りとは言えず、またこのような状態は「無心三昧」あるいは「無通三昧」とも表現されるそうだ。

一つの公案に答えが出せた時全ての公案もわかるはずという前提のゆえに、それを「点検」するために別の公案を出すことが一般に行われる。また、公案がその人に合わないときには別の公案に代えることもしばしば行われるそうだ。

最近では一般の婦人を受け入れる「婦人禅院」も存在し、一週間とか一カ月とかの期間で行われる修行もあるという。

なお、興輪寺では近所の子供達が夕方、集まって坐禅をしていくこともあり、開かれた場所になっていることを強調されて居られた。

なお、韓国では最近、三十代の女性の出家者が増える傾向にあるという。昔は、小さな子供の時から出家したかあるいは年を取ってから出家する人が多かつたらしい。しかし、先述したように現在では出家の年齢は上限四十歳と決められており、かなり出家に制限が加えられている。

なお、私たちが伺った八月二十七日は、旧暦の七月三十日にあたり、次の日の八月一日より「正中」に入るとい

修行希望者が自主的に禅院に集まり、坐禅の修行に入ることであった。日程はほぼ三カ月、早朝三時より修行が始まる。朝の坐禅の後、七時から十時まで坐禅、十一時に昼食をとった後、また一時から四時まで坐禅、夜は七時から十時まで坐禅、真夜中の十二時までは自由に過ごして良く、中には坐禅に専心する人もあるという。かなり個人個人の自主性に任された坐禅修行のようであった。

なお、実際の打坐は一時間単位で行われており、休憩も入るといふ。また歩く時にも公案を考えるという。以上のような形式で看話禅が行われているとのことであった。

法念スニムへのインタビューから得た感想であるが、スニムが自らの言葉で看話禅を語ろうとしていることには感銘を受けた。また、看話禅の目的も自分なりに捉えていて、好感が持てた。

おわりに

韓国の仏教とりわけ幾つかの曹溪宗寺院の禅院の現状を報告するだけの内容になってしまったが、禅に関心を持っている方の一助になれば幸いである。韓国の曹溪宗の現

状を見てきて一番印象に残ったことは、台湾や中国では閉関と呼ばれる修行が韓国では無門関と呼ばれ、今日に継承されていることであつた。しかもそれが組織的にかつ日常に行われていることには驚きを禁じ得なかつた。場所の数だけは三箇所と少なかつたが、入りたくとも入れない程度に実習するスニムが数多く存在するのである。

さらには韓国の禅の特徴として、印度仏教からの文脈で考えれば「止」(samatha)に重点が置かれているのではないかと思われることである。看話禅にしても心の働きを静かにすることが目指されているのである。また韓国の仏教界がスニムの継続教育システムを完成させつつあることにも驚かされた。日本では僧侶に対する継続教育は、あるにはあるにしても本格的なものはまだ緒に着いたばかりではないだろう。

また韓国では禅は看話禅または公案禅との言葉で呼ばれ、時には話頭禅でもありとされることがあつたが、用語に関しては多少の誤解も存在しているように思われた。筆者は、話頭禅は看話禅または公案禅とは異なつた内実を指し示すのではないかとの印象を持っている。東アジア世界に存在

するこれらの呼び方については別稿を期して分析を行つてみたいと考えている。

注

- (1) 鎌田茂雄『朝鮮仏教史』(東京大学出版会、一九八七年) 金煥泰著・沖本克己監訳『韓国仏教史』(禅文化研究所、一九八五年) など。
- (2) 前田惠學「韓国仏教の特質」(民族的エートスと仏教——日本と韓国——『アジア時報』一九七四年三月)。
- (3) 金龍煥「韓国仏教の特色と現状」(『東洋学術研究』三九一一、二〇〇〇年)。
- (4) 曹溪宗は韓国を代表する出家者集団である。本山はソウルの曹溪寺。詳細はホームページ <http://international.jogjesa.or.kr/english/index.asp> を参照。また東京都荒川区東日暮里三一一二七に日本曹溪宗東京布教院智正寺が存在する。なお、<http://eng.buddhism.or.kr/> は曹溪宗に関する情報が掲載された公式サイトである。
- (5) 毎年、全国禅院首座会より発行される『禅社芳御録』がある。一九九八年版によれば、比丘禅院は五十四箇所、比丘尼禅院は五十九箇所あり、総計千九百八十一名が参加したことになる。二〇〇二年版によれば、比丘禅院は六十八箇所、比丘尼禅院は六十箇所、総計二千四百五十五名の僧尼が参加したという。禅院の数が次第に増える傾向にある。